

「良き隣人となる」

ルカによる福音書 10章25～37節

聖学院大学 大学チャプレン・政治経済学部チャプレン 菊地 順

I.

新学期が始まり、多くの新入生を迎えて、共に全学礼拝を守れることを嬉しく思っています。ところで、聖学院大学には、いくつかのモットー、標語があります。新入生の人たちも、すでに何度か聞いているかと思いますが、まず「神を仰ぎ、人に仕う」というモットーがあります。これは、大学のみならず、学校法人全体のモットーでもあります。また、大学には、大学独自の2つのモットーがあります。一つは、「*pietas et scientia*」というラテン語のモットーで、通常「敬虔と学問」と訳されています。また、もう一つは、聖書の言葉から取られた「真理はあなたたちを自由にする」というギリシャ語のモットーです。これらのモットーに加え、学校法人全体の教育目標として「*only one for others*」という言葉があります。これは、「他者のために生きる掛け替えのない個人」という意味です。こうしたモットー、標語は、全体として、2つの次元を指し示しています。一つは、神へと向かう次元です。そして、もう一つは他者へと向かう次元です。「神を仰ぎ、人に仕う」の〈神を仰ぐ〉とか、「敬虔と学問」の〈敬虔〉という言葉は、神に向かう次元を示しています。それに対し、〈人に仕える〉とか「*only one for others*」の〈*for others*〉という言葉は、他者に向かう次元を示しています。そして、こうした神へと向かう垂直的次元と、他者へと向かう水平的次元を結び合わせているのが、〈*only one*〉と表現されている掛け替えのない一人ひとりです。掛け替えのない一人ひとりに、神に向かう垂直的次元と他者へ向かう水平的次元があるのです。また、だからこそ、一人ひとりとは掛け替えのない存在であるとも言えるのです。

II.

聖学院大学は、この2つの次元を豊かに育む教育を目指しています。それは、そのことを通して、一人ひとりが、掛け替えのない人格として、豊かに成長していくことができると考えているからです。そこで、今日は、聖書に描かれている、その具体的な姿の一つを、皆さんと共に見てみたいと思います。それは、ルカによる福音書 10 章に描かれている一人のサマリア人の姿です。この聖書の箇所は、一般に「良きサマリア人」と呼ばれているところで、話の内容はこういうものです。エルサレムからエリコという街に下って行く途中、ある人が、追剥に襲われたというのです。そして、服を剥ぎ取られ、殴られ、半殺しにされました。そういった突然の不幸が、ある人の身の上で起こったのです。この人は、ユダヤ人でした。わざわざそうは書いていませんが、書いていないということが、ユダヤ人であるということを前提としています。この事件の後、そこを 3 人の人が通りかかりました。最初に通りかかったのは祭司でした。しかし、この祭司は、その人を見ると、「道の向こう側を通過して」行ってしまいました。神に仕える祭司であるのに、半殺しにされた人を見捨てて行ってしまったのです。祭司は死体に触れてはなら

ないと定められていたため、そういう行動に出たのかもしれませんが。しかし、この祭司は、近寄って、生きているかどうか確かめることすらしませんでした。二番目に通りかかったのは、レビ人です。このレビ人も、広い意味では祭司の一族でした。しかし、この人も、その人を見ると、「道の向こう側を通過して」行ってしまったのです。同じように、近寄って、確かめることすらしませんでした。

次に通りかかったのは、一人のサマリア人でした。この人は、「そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱しました。そして、それだけではなく、「翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡し」、「この人を介抱してください。費用がもつとかかったら、帰りがけに払います」と言ったのです。主イエスは、ここで、このサマリア人の取った行動について、一つ一つ具体的に語っています。何よりも、このサマリア人は、この瀕死の重傷を負った人の「そばに」来たのです。祭司もレビ人も、そばにすら来ずに、「道の向こう側をとおって」行ってしまいました。しかし、サマリア人は「そばに」きたのです。そして、その人を見て「哀れに」思ったのです。深い同情を寄せたのです。そして、さらに「近寄って」、傷口に油とぶどう酒を注いで包帯をしたのです。そうした一応の手当てをしたあと、動けないでいるその人を、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行ったのです。おそらく、宿屋に行っても、その人のためにいろいろ介抱したに違いありません。そして、翌日、中断した旅を続けるために宿を出るとき、宿屋の主人に金を渡し、介抱を依頼しただけではなく、経費の保証までもしたのです。

人に関わるということは、時間と労力とお金がかかることです。人のために自分の時間を使い、人のために自分の労力を使い、人のために自分のお金を使うのです。それは、利己的な人間にとっては、決して簡単なことではありません。事実、先に通りかかった二人のユダヤ人は、素通りしていきました。しかし、このサマリア人は違いました。彼は素通りしなかったのです。素通りしないどころか、「そばに」来て、「哀れに」思い、目の前にいる人が必要としていることをできるだけ行うことで、手助けをしたのです。

III.

ところで、このサマリア人というのは、ユダヤ人たちから軽蔑されていた人たちでした。サマリア人たちも、元々は同じユダヤ人でしたが、紀元前 8 世紀に、サマリア人たちが住んでいた地域がアッシリアという国に滅ぼされ、それ以後、この地域に外国の民が住むようになり、民族の血の純血が保たれなくなります。そのため、血の純血を重んじるユダヤ人たちから侮蔑され、差別されるようになっていきます。そして、イエス・キリストが活動していた時代には、ユダヤ人たちはサマリア人たちと交わろうとすらしなかったのです。

そうした背景を知ると、このサマリア人がなぜユダヤ人を助けたのか、なぜここまで手厚く介抱したのか、不思議に思えてくるかもしれません。それは、このサマリア人が特別に良い人だったからなのでしょう。博愛主義者で、困っているユダヤ人を見捨てていくことはできなかったということなのでしょう。もちろん、そういう面もあると思います。しかし、もう一度、今日の聖書の箇所を読みますと、別の面も見えてくるように思います。それは、初めの部分です。そもそも、この話は、一つの質問から始まっています。それは、一人の律法の専門家が、「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるで

しょうか」という質問です。それに対して、イエス・キリストは、逆に「律法には何と書いてあるか」と尋ねています。それに対し、律法の専門家は、『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります」と答えています。これは、今わたしたちが持っている旧約聖書の教えを要約した言葉です。この答えに対して、イエス・キリストは、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と答えられました。＜分かっているのだから、それを実行しなさい＞とイエス・キリストは言われたのです。そこで、この律法の専門家は、「自分を正当化し」、また弁護しようとして、「では、わたしの隣人とはだれなのですか」と尋ねたのです。そして、その質問に対して、この「良きサマリア人」の話が語られたのです。ですから、このサマリア人というのは、サマリア人であると同時に、旧約聖書の大事な教えである＜全身全霊をもって神を愛すること＞と＜隣人を自分のように愛すること＞とを、身を持って実践した人でもあるのです。その意味では、ただ良い人だったから、あるいは博愛主義者だったから、ユダヤ人を介抱したというのではないのです。むしろ、神を畏れ、神の教えに従う人であったのです。だからこそ、普段は自分たちを蔑んでいるユダヤ人であっても、その人に救いの手を差し伸べることができたのです。神を畏れ、神を愛するという垂直の次元があるがゆえに、自分たちを蔑む人にも、愛を持って関わって行くことができたのです。

IV.

この話を終えたとき、イエス・キリストは、自分に質問したユダヤ人の律法の専門家に対して、「あなたはこの三人の中で、だれが追はぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と尋ねています。それに対し、律法の専門家は、「その人を助けた人です」と答えました。同胞のユダヤ人ではなく、ユダヤ人から蔑まれていたサマリア人が、その人の隣人になったのです。そこで、イエス・キリストは、最後に、もう一度言われました、「行って、あなたも同じようにしなさい」と。この言葉は、重いと思います。わたしたちも、良き隣人になりたいと思います。神を見上げる中で、わたしたち一人ひとりも、愛を持って困難な中にいる人、不安の中にいる人、孤独の中にいる人の良き隣人となっていくことができればと思います。

今週の金曜日から2泊3日で、学生と教職員の人たち40名余りが、岩手県の釜石市に、ボランティアに出かけます。被災地で仮設住宅に住んでいる人たちに、桜の苗木をプレゼントし、また子供たちと交流の時を持ちます。こうした活動も、良き隣人となる一つの出会いとなるのではないかと思います。わたしたちは、こうした輪を広げていきたいと思います。そして、そのことを通して、掛け替えのない人生を送っている一人ひとりが、より豊かで実り多い人生を送ることができればと願っています。そして、そのためにも、「良き隣人となる」という言葉を共に心に刻みながら、キャンパスライフを過ごしていきたいと思います。

2014年4月15日 聖学院大学 全学礼拝